

日本学会の新たな基本戦略 - 地域と対話する医療・福祉システム

日本予防医学リスクマネジメント学会理事長 酒井亮二

2007 年5 月5 日～6 日に北海道大学で医療安全フォーラムを開催し、北海道各地から多数の病院関係者が参加されました。このフォーラムは、北海道の多数の会員から要請を受けて、特別に行われましたため、現地からの報告を中心に企画いたしました。

さて、今回の医療安全フォーラムは、夕張市に一例をみるように、全土にわたって地域経済の崩壊が始まっている北海道でたまたま開催されました。現地から諸報告をまとめると、「経済の崩壊しつつある地域では医療の存続ができない」、「医療にかかるために必要な最低資金を住民が持っていない」という最悪の貧困のシナリオが進行しつつある、とのことでした。

雪深い寒村で、一人暮らしする老人は超高齢化社会のため北海道、東北、北陸に日常的に増えつづけ、それらの地域で暖かい手を必死に差し伸べてきた医師と看護師も高齢化し、持続不可能な医療と福祉となり、江戸時代にも逆戻りする貧困と病苦の地獄図が日本に出現しています。冬眠のような生活の中で、医療と福祉に見放されて、孤独に死んでいく人々が日本全国に増えているという、「究極のリスク」が21 世紀の今日の日本に出現しています。医療と地域の2 重崩壊に直面している危機的地域では、地域経済の復活まで、診療報酬の特別加算、低医療費・医療費無料、医療福祉特別区などどのような対策の組み合わせが必要なのでしょうか？

これらの事実は、医療・福祉供給システムについては、平均とばらつきの2つの観点からの検討が必要であることを意味します。つまり、全国としての平均的な医療・福祉供給システムからはかけ離れた地域では、その地域の特徴と相応するシステムの構築が必要です。今日の医療・福祉は地域のニーズに対応して出現しました。しかし、医療と福祉が地域を指導することも必要であり、地域と相互対話をする医療・福祉が今後の新しいシステムとして必要になっています。これにより、受身の医療・福祉から、地域を育成する医療・福祉への方向性、つまり医療・福祉機関による予防医療・介護予防の推進が21世紀型の新しい命題です。医療・福祉機関に蓄えられている沢山の知と技は、地域の人々の健康と安全の向上に有意義です。

以上の理由から、この日本学会の今後の基本戦略は、「地域と対話する医療・福祉」を検討することであると、満場合意されました。日本学会の今年度からの新しいキーワードである「安らぎと豊かさの医療」が日本の新しい医療・福祉活動の羅針盤になれば幸いです。